

—第 24 回 デジタルアーカイブ研究会—

日 時 2025 年 6 月 22 日 (日) 14:00~17:00

開催方法 オンライン (Zoom を使用します)

コーディネーター: 林 知代、江添 誠

プログラム

※発表時間は 10 分、質疑応答は 10 分です。

1. 地方自治体の公文書管理と DA の関連性について
(14:00~14:20)
山口 洋 (民間企業)
2. 岐阜県内の市町村デジタルアーカイブの現状と課題
(14:20~14:40)
神林 三奈 (岐阜女子大学大学院 文化創造学研究科)
3. 川端康成関連資料のデジタルアーカイブ横断構想
(14:40~15:00)
長縄 咲楽 (岐阜女子大学大学院 文化創造学研究科)
4. 「ボトムアップ」型無形文化遺産デジタルアーカイブの構築
(15:00~15:20)
辻 修次 (伊豆半島ユネスコ世界ジオパーク)
5. 沼の記憶を編む: 感性に根ざした地域文化アーカイブの試み
—DAO と PAI を活用した参加型記録のプロトタイピング—
(15:20~15:40)
木村 京子 (デジタルアーキビスト)
6. デジタルアーキビストの活動紹介
(15:40~16:00)
伊勢 博 (株式会社アーキネット)
7. 地域アーカイブ「阿波藍商、遠藤^{はるたる}春足^{はるたり}コレクション」について
(16:00~16:20)
木村 涼 (岐阜女子大学)
8. 「舞台美術作品データベース」の必要性と利活用について
(16:20~16:40)
最上 雅子 (岐阜女子大学大学院 文化創造学研究科)
9. 生成 AI を用いた「沖縄おうらい」デジタルアーカイブの改善 (1)
(16:40~17:00)
加藤 真由美 (岐阜女子大学 沖縄サテライト校)

デジタルアーカイブ研究会 研究会実施事務局 (岐阜女子大学)
〒500-8813 岐阜市明德町 10 番地 岐阜女子大学文化情報研究センター内
電話 : 058-267-5301 (日本デジタルアーキビスト資格認定機構)

第 24 回デジタルアーカイブ研究会 発表概要

※発表時間は 10 分、質疑応答は 10 分です。

1.	地方自治体の公文書管理と DA の関連性について <p style="text-align: right;">(14 : 00～14 : 20) 山口 洋 (民間企業)</p> <p>平成 23 年 4 月に施行された公文書管理法は、地方自治体において努力義務を課すものとなっており、多くの地方自治体で適切な公文書管理を全うするべく、専用 IT システムの導入が進んだ。しかし、IT システム導入前の公文書については、文書庫へ保存されたまま、管理されているとは考えにくい状況があり、貴重な地域の情報資産が散逸しかねない状況になりつつある。また、地方自治体職員が撮影した地域イベントの静止画や動画は、公文書という扱いができず、ファイルサーバーなどの劣化(更改)により、削除を余儀なくされるといったケースが聞かれる。地方自治体において公文書管理とデジタル・アーカイブの関係を考察する。</p>
2.	岐阜県内の市町村デジタルアーカイブの現状と課題 <p style="text-align: right;">(14 : 20～14 : 40) 神林 三奈 (岐阜女子大学大学院 文化創造学研究科)</p> <p>博物館法の改正により、博物館が行う事業として、電磁的記録、いわゆるデジタルアーカイブの作成と公開が条文に加えられ、市町村や県の文化財保護政策の中でもデジタルアーカイブの活用が謳われている。本発表では岐阜県内の各市町村が保有する地域資料のデジタルアーカイブの公開状況と、今後デジタルアーカイブの構築・公開を進めていくうえでの課題について報告をおこなう。</p>
3.	川端康成関連資料のデジタルアーカイブ横断構想 <p style="text-align: right;">(14 : 40～15 : 00) 長縄 咲楽 (岐阜女子大学大学院 文化創造学研究科)</p> <p>近現代日本文学を代表する作家、「新感覚派」の一員であった川端康成は、1968 年に日本人初のノーベル文学賞を受賞し、その受賞講演では日本人の死生観や美意識を世界に紹介した。多少の脚本はあるものの実体験を元にした作品として、川端は初期の頃から小説や自伝的作品に具体的な地名や背景を登場させていることが判明し研究・追跡調査がなされている。今後も更なる川端康成研究の発展を願い、川端康成関連資料デジタルアーカイブを作成する際の計画案を練る。</p>
4.	「ボトムアップ」型無形文化遺産デジタルアーカイブの構築 <p style="text-align: right;">(15 : 00～15 : 20) 辻 修次 (伊豆半島ユネスコ世界ジオパーク)</p> <p>国連教育科学文化機関は、21 世紀に入り無形文化遺産の保全を文化政策の中核的なアジェンダとして提示し、傘下機関に強く参画を求めている。この文脈においては、特にコミュニティが保全活動の中核を担うことが重視される。発表者は、この規範を尊重し、地域住民がコンテンツの収集に直接参画するデジタルアーカイブの構築に着手したが、法的権利、地域社会の権力構造、統一的なメタデータの設定などの課題が明らかになりつつある。本発表は、これらを共有することを通じ、文化多様性の保全に関する DA の役割を論ずる一助とする。</p>
5.	沼の記憶を編む：感性に根ざした地域文化アーカイブの試み —DAO と PAI を活用した参加型記録のプロトタイピング— <p style="text-align: right;">(15 : 20～15 : 40) 木村 京子 (デジタルアーキビスト)</p> <p>埼玉県比企丘陵の沼地をフィールドに、感性・記憶・物語を軸とした地域文化アーカイブの実践を報告する。アートやワークショップを通じた記録・共有活動に加え、DAO (自律分散型組織) や PAI (パーソナル AI) を用いた参加型アーカイブ設計の試行も行っている。従来の制度的アーカイブに収まりきらない「暮らしの文化資源」を、いかに共有可能なコモンズへと開いていけるかを検討する。</p>

6.	<p>デジタルアーキビストの活動紹介</p> <p style="text-align: right;">(15 : 40～16 : 00)</p> <p style="text-align: right;">伊勢 博 (株式会社アーキネット)</p> <p>上級デジタルアーキビストの認定を受けたのが、2009年3月。その後の取り組みとして、東北文教大学へのDAカリキュラム提案(認定養成機関)、山形県立博物館のデータベース作成、オーラルヒストリーの取り組み等を題材にデジタルアーキビストとしての実践事例を紹介する。</p>
7.	<p>地域アーカイブ「阿波藍商、遠藤春足コレクション」について</p> <p style="text-align: right;">(16 : 00～16 : 20)</p> <p style="text-align: right;">木村 涼 (岐阜女子大学)</p> <p>江戸時代、阿波国(現徳島県)の遠藤家は代々、「関東売藍仲間三十六人」に名を連ねるほど、阿波地域を代表的する藍商である。なかでも、五代目当主、遠藤春足(1782～1834)は、家業の藍商を務める一方、狂歌師としての側面も持っていた。その関係で、現遠藤家には、狂歌の摺り物や和歌、錦絵、軸物などが多く遺されている。遠藤家所蔵の史資料は、徳島県立文書館及び四国大学の協力を得て、「狂歌文書館」としてインターネットにて公開されている。本報告では、この地域アーカイブ「狂歌文書館」について検討を加えていく。</p>
8.	<p>「舞台美術作品データベース」の必要性と利活用について</p> <p style="text-align: right;">(16 : 20～16 : 40)</p> <p style="text-align: right;">最上 雅子 (岐阜女子大学大学院 文化創造学研究所)</p> <p>本論文は「舞台美術作品データベース」の必要性と利活用を探求するものである。貴重な舞台美術資料の散逸を防ぎ、教育・人材育成、一般公開を目的としたDAである。資料収集、権利処理、メタデータの標準化、運営の持続性には、課題が多いと考察する。アンケートでは、教育資源としての高い有用性が示唆されているが、研究がひつようである。今後の機能改善と図書館連携等、公共性向上への可能性も合わせて論じる。</p>
9.	<p>生成AIを用いた「沖縄おうらい」デジタルアーカイブの改善(1)</p> <p style="text-align: right;">(16 : 40～17 : 00)</p> <p style="text-align: right;">加藤 真由美 (岐阜女子大学 沖縄サテライト校)</p> <p>近年、生成AIが一般にも広く利用されるようになり、社会全体としてもより多様な分野での生成AIの活用を考える必要性が高まっている。そこで、デジタルアーカイブ分野における活用を検討するため、本学の地域資源デジタルアーカイブの資料を利用して開発した、沖縄県への高校生の観光用学習材「沖縄おうらい」の改善に生成AIであるChatGPTを活用し、試作から改善案の決定を行ったので報告する。</p>